宗像

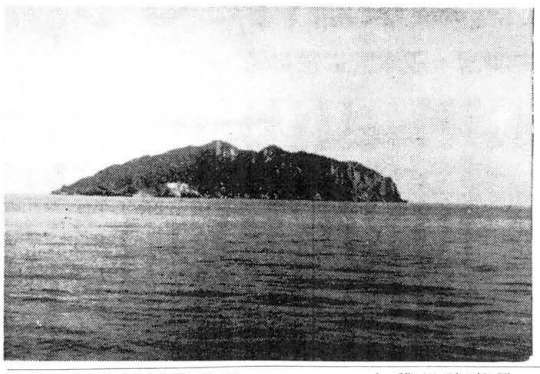
行発日一月一
所行発
社会大像
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話神湊133番
定価一年送料共500円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡支社　福岡市吉塚西林寺町　西林寺内
電話　九四五番
本社　京都市下京区油小路通六条北入
電話　京都（35）六〇六・三三四番　七三三・九七八九番

皇太子殿下御召艇

——多紀理（たぎり）号について——

御神島——沖之島



昨年十二月社用のため、久保宮司が宮内庁に出頭した際、掌典長永積寅彦氏に掌典矢尾板敬氏が、皇太子殿下の御召艇に、宗像大社の御神勅のままに、広大な玄海を守護せられている話をされているのを、お聞きしたことがある。皇室守護、国家鎮護の御使命をもって、皇祖であり御親神でもある天照大神の御神勅にちなむ御船名がつけられ、御神勅のままに、広大な玄海を含む要衝として早く注目されていた宗像の地に、鎮まりました大社の尊貴なる御神名にちなむ御船名を選ばれたことに、関係者は深い感激を持っていたのである。

たまたま去る一月下旬に、出光興産株式会社参与の角忠朗氏が東宮侍従の黒木さんを訪われた時、御召艇「多紀理号」の御名称について聞かれたお話を、ここに謹記して一般に御披露することにした。

お話は皇太子殿下御成婚前の昭和二十二年にさかのぼる。その頃御召艇が建造されたが、御命名を当時の宮内庁書陵部編修課長の土井弘氏（現奈良正倉院事務長）に委嘱されたのである。土井課長を中心に調査がおこなわれ、十一の船名が候補として挙げられた中から、御選定になったのが「多紀理号」である。

御召艇につける「多紀理」の文字の揮毫は、八尾板掌典に御下命があり、同氏の達筆がそのまま艇側に刻まれている。なおこの御召艇は、長さ十二呎、巾四呎で、デルタ造船株式会社の手によって建造された由。平素は葉山御用邸の艇庫に納められている。

多紀理姫神は、古く日本書紀に「道主貴」（みちぬしのむち）という尊称が述べられているように、天照大神の御子神である宗像三女神の一柱である。三女神は筑紫の海北道中の三所（沖ノ島・大島・田島）に、それぞれ鎮座ぜられ、九州から朝鮮に至る海上を守護せられる尊貴の神としてたたえられた御神徳に、御神名の由来が考えられるのである。

特にこの大神は、玄海洋上の神島である沖ノ島の沖津宮の主神であらせられ、古くからその霊威に対し皇室の御崇敬極めて厚く、先年発見された三千年近い貴重な祭祀の神宝が、皇室のなみなみならぬ奉祭の精神を物語っている。この大神の神宝三万余点は、先に国宝または重要文化財に指定され、しかしくも皇居に於いて、天覧に供せられたこともある。

御召艇建造にあたって、多くの船名候補の中から、大社の御神名にちなむ「多紀理号」を選ばれたことは、まことにゆえなしとしないところである。大社御祭神の大使命が、皇室の御繁栄に、海洋守護の御神徳が、御召艇の御安泰に、絶えず顕現されることを念願してやまない。

宗像大社奨学生選定

六中学校長会議開かる

昭和三十四年に、皇太子殿下御成婚記念事業の一端として、当大社奨学金が設定され、昭和三十五年に当大社奨学金第一回目が給付されてより、早くも十年目を迎えるに至り受給生は本年で七十八名に達する。

早春の二月十四日、午前中より当大社斎館に於て、本年度奨学生の選考会が都内六中学校長及び大社関係職員が出席して開催された。

会議は先ず久保宮司の挨拶に始まり、葦津権宮司、担当の宇都宮弥宣より、今春中学校を卒業し高校進学の学徒の内より学業に肩せず、経済的理由に依らず、人物本位に各校より二名づつ選定して頂きたい等の説明の後、必要書類が配布された。又各校長先生方より奨学金の多寡は問題外として、神恩を蒙る学徒を拡大する意味から、将来一人でも増員の計画を是非願うとの意見等あり、会議は有意義に終了し懇談に移った。

すでに社会で活躍している受給生先輩より、後輩の為寄せられる尊い資金も年々多くなりつゝあり、奨学金受給生の人員増加も速かに実現出来るのではなかろうか。

春まつりの御案内

恒例の春季大祭が来る三月三十一日から四月二日まで斎行されます。

昔はこの春祭の時期になると神社の秘蔵である壮宝の虫干しを行い、一般参詣者に対して展示を行っていましたので、保存という言葉が使われていました。宝物館完成後は、この由緒ある行事も宝物館に移され、宝物の数々は毎日展示して皆様の御覧に供しています。

しかし祭典と神賑行事は年々盛大に行われていますので、皆様御誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

記

三月三十一日
午後五時、高宮祭並地主祭
午後六時、宵祭り

四月一日
午前十時、大祭、氏子奉幣並に風俗舞、浦安舞斎行。

四月二日
午前十時、大祭
午前十一時、宗像護国神社春季大祭
午後三時、献茶式
他に奉納剣道大会（日時未定）

論説　元禄犬ざむらい

元禄を回想する。絢爛たる江戸の春に人心は陶酔し、太平を謳歌した。財力を誇り派手を好む商人社会は、旺盛な発展力を競い、自己顕示に浮身をやつした。支配階級の武士社会も、厳しい士魂の鍛練を求める動作生活は、元禄館、元禄袖が象徴する華麗さの中に、歓楽を追う風潮を濃くした。

その世情を引いて、現代に昭和元禄が名づけられ、明治にも鹿鳴館時代と称する明治元禄があったのは、息づまる乱世が大きく転換して自由奔放と没義道の、いわゆる天下太平の堕落模様ともうけ取れる。元禄は文弱の栄華のみてくれ時代でもあった。

花やいだ江戸の春に、突如として天下の耳目を聳動したのが、千代田城中の刃傷事件であった。そして翌年師走の雪に、天下の賞賛を集めたのが、赤穂浪士の快挙であった。

演劇の忠臣蔵は、若い浅野藩主の短慮に発端し、士魂を貫ぬく遺臣の復仇に、喝采の幕を下すのであるが、その間同志四十七人は開城から討入りまで、浪々悲傷、困苦危殆の道を歩んだ。それは行く手に光明が約束されてもいないし、臥薪嘗胆が不発の結果に終るやも知れない、二年にわたる闇黒の行脚でもあった。

武士道の意気地、あっぱれのものゝふの心底、それを周囲に見せての生き方は、忍耐の必要もなく容易だろう。利剣をかざして、勇ましい姿をまっしぐらに走らすあり方は、気も晴れやかだろう。然し、性根の坐った武士を世間に見せることは許されなかった。あえて犬ざむらいにならねばならなかった。犬ざむらい達は、武士を捨てて歩き続けたのである。

三々五々、東への道を志す彼等を待つものは侮辱、貧窮、暗殺であった。それに自己顕示の言を吐いたり、反発の剣を抜いたりすれば、万事雄々しく中途に挫折していたのである。

盟約の同志は、最初百名以上をかぞえた。次々に小節に負けて裏切り、私情に捕われて脱落し、犬ざむらいになり得た者だけが、最後まで東への道に残った。犬ざむらい四十七。死後に義士。

犬ざむらいでなければ、大事は成し遂げられなかったのである。泉岳寺の山門はくぐれなかったのである。無法の馬方にわび状を書き、他藩士に腰抜けと罵られた犬ざむらいだけが、泣かず怒らず憎まず、陣太鼓をひびかすことが出来たのである。

話を現代に戻す。独自の教育信条を進学、精神として、各地に大学高校を建設し総長A氏は「絶対絶命でも余裕を持て」と学生に教える。学生の頃から柔剣道はじめ、水泳庭球野球と何でもやった運動家で、六十歳の今日なお巨髪の黒帯姿が、柔道部学生を相手に連続わざを披露している。

「柔道に学ぶべき点は、肉体的精神はもとより人間相手にのるかそるかの決断、踏みきり、忍耐、それが人生に処する態度に通ずる、相手の動きを総合的に判断すると同時に、心理も読んでのるかそるかの場合にも心の余裕を持つこと。私が柔道を学び柔道に教えられたのはこの点です」と。

A氏の述懐には、道は一つの貴重な人生の経験が根底にある。戦時中ある本省の局長であったA氏は、東条首相の方針に抗して自説を曲げず、遂に二等兵として絶体絶命の召集令状を出され、九死に一生の得がたい情況悪化の戦域に追われかけた。よく恥辱に堪え、迫害を忍んで苦難を乗り越えた過去が、今日の信条に生きている。

忍という字が、刃の下にある心を教えている。元禄も昭和も、大事を成そうとする者は、刃の下に心をおく腰抜け意気地なしの犬ざむらいでなければならない。真剣と絶妙は、己を捨てた忍にある。晴れても曇っても、人生行路に悩み苦しみはつきものである。陰気な風雪の寒中にもとより、はなやかな栄光の春陽にも、大事に直面する者、難局に起つ者は、とがまの月を仰ぐな、おぼろ月を眺めよ、その方にが悟道の達人が説いている。

犬ざむらいの忠魂集団は、それぞれ貴重な妙薬を遺した。腰抜け意気地なしにならねばならぬ時、「犬ざむらい教典」が教える妙薬をしずかに服用する心がけが、きわめて肝要なことである。

阿蒙少言

舶来品をありがたがる傾向は、明治以来先進文化移入に熱心のあまり、習性化して今日も抜けない。香港カゼの流行は、ありがたがっての引き込みではあるまいが、これは際輸品甚だ迷惑。他にも伝染病化した迷惑なしろもの、いくつもある。その一つに物質重の権利思想が考えられる。病院ひらがって社会環境、情義没却、利己固執の跋扈を見る。各地にひろがった学園紛争は、国会の政治問題にまで発展しているが、症状は新しくとも病根は古いと言う。○学園紛争を終戦直後の労働争議の続発、労使ともに困難な処方箋に直面した状況に似ると説く学者は、戦前長年の労働問題が、政治的圧力におさえられて内攻し、爆発したと見れば、古く且つ新しい現象であろうと結ぶ。○社会も家庭も、現実の生活が教えてくれる人生の智慧が、そのはたらく方向によって、色々な智慧を描く。予想外な逸脱、自制のない権利の揚言、衝突紛争への暴走、その結果残るものは、権利思想の勝利感とほめられようか。○海外での話、家庭争議を通行人の多い街でやるのを何度も見た。大ぜいの前で、わめき散らす女性、主人らしい男性はやがて沈黙して去るか。笑う者、同情する者、さげすむ者、さまざまの表情が見物する。○沈黙は敗北であろうか、わめき女は勝利者であろうか。人生の智慧が描き出す常衆飯事の習慣化、それが街頭の公開となっているらしい。○沈黙は敗北ではない。心中の憐れみと明日の仕事の為に、人生の智慧がわめき女と異った方向にはたらいていると観察すれば、智慧の噴水はホースの転機に妙味がある。○相撲に「ふところ深い」の用語がある。理づめの思想からは生れない言葉と言われる。（白　鷺）

第九十三回　宗像大社献詠歌

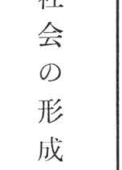
毎月十五日〆切　詠草到着順

香椎　桜井　ツ子
ひと方に風が並てゆきたらむ銀杏並木路の黄に染る落葉
田熊　小野　角次郎
許嫁岳山裾に如月の空は晴れたり汽車は行くなり
田熊　小野かをる
つゝましく香ひはめ春を待つ庭椿こそ我家のシンボル
名残　竹原　圓
我が友が区長となりて初寄りの公民館に灯のともりいる
勝浦　永島　文子
枝は折れ幹はいためる老松の荒潮風に耐へて春待つ
田久　小方　実
病院ひらがって社会環境、情義没却、利己固執の跋扈を見る。各地にひろがった学園紛争は、国会の政治問題にまで発展しているが、症状は新しくとも病根は古いと言う。○学園紛争を終戦直後の労働争議の続発、労使ともに困難な処方箋に直面した状況に似ると説く学者は、戦前長年の労働問題が、政治的圧力におさえられて内攻し、爆発したと見れば、古く且つ新しい現象であろうと結ぶ。○社会も家庭も、現実の生活が教えてくれる人生の智慧が、そのはたらく方向によって、色々な智慧を描く。予想外な逸脱、自制のない権利の揚言、衝突紛争への暴走、その結果残るものは、権利思想の勝利感とほめられようか。○海外での話、家庭争議を通行人の多い街でやるのを何度も見た。大ぜいの前で、わめき散らす女性、主人らしい男性はやがて沈黙して去るか。笑う者、同情する者、さげすむ者、さまざまの表情が見物する。○沈黙は敗北であろうか、わめき女は勝利者であろうか。人生の智慧が描き出す常衆飯事の習慣化、それが街頭の公開となっているらしい。○沈黙は敗北ではない。心中の憐れみと明日の仕事の為に、人生の智慧がわめき女と異った方向にはたらいていると観察すれば、智慧の噴水はホースの転機に妙味がある。○相撲に「ふところ深い」の用語がある。理づめの思想からは生れない言葉と言われる。（白　鷺）
田熊　鷲頭かつ代
丹念に覆柑のすじを取るわれの指を目守りて待てる幼な子
津屋崎　浜津　鴻浪
さよならと打振るより一連の光りとなりて輪を画きたり
宮田　片山　一
日本の大将のはての若人ら楽天の塔に石を降らせり
福岡　高橋　傘翁
八十路越え鍔足ぬなど愚痴るまじ命余れる身と思へば
大井　吉田　和子
春雨の音なく降りて紫陽花の芽吹くに枝にも水光る
大島　越智　治子
渡船もとたえて霧のちぎれるころ井当明り若うど二人
大島　越智真知子
竹刀ふりよく食い眠る日々の子と夕げを囲む母のやすらぎ
遠賀　長畑　房江
氷雨降る暗き日すがら炉辺に帝のフリージャほのかに匂へり
福岡　江崎　琴子
広前にうつ拍手のこだまして宮居宮居のころすがしき
徳重　石松やす子
直ぎ子の直き心をすこやかに伸ばしめ給へ宗像の神
名島　吉田　信夫
親に背き舞台に立つ娘め娘の白き視線にたじろぐ教師
久留米　篠田太郎坊
居所を知らせておかねばならぬ職の我の像寝に日は憂しかり
戸畑　田中ハツセ
高給を頼りかかれる手伝婦一応吾に相談にくる
津屋崎　佐川　凡石
古き代を伝えてきた高宮は森ふかくして鴨の鳴く
武丸　立石なせの
飛行機の行方を追へば樅の木の梢に白き月の月あり
宮田　北原　君子
夕明り残る稲田に子を待ちて集めし稲束に露の光れり
吉武　原田　リノ
突風に取られし帽子は転がりて蓬の芽吹く土手にとまりぬ
東郷　藤崎　辰子
二十余年たつれて分かぬ戦友の行方をようよう諦めし夫
宗像　中村　幸
雀かなかけしと告ぐる幼孫まつげにたまる雪も払はず
福間　井原　元彦
（中国路の大雪に）
世の中の見にくさすべて押し包み雪は見事に降り積りけり
吉田　占部　由久
しげの海白馬のおどる如くにて怒濤は高く波止にしぶけり
大井　安部　重郎
すくすくと育つ桧の下刈れば冬陽あまねく地照しき
大井　安部　静子
春雨の音なく降りて紫陽花の芽吹くに枝にも水光る
武丸　立石　昇
照り映ゆる霧氷の山の見ゆるとこ小雪降る朝鳥は静まり
大島　越智真知子
竹刀ふりよく食い眠る日々の子と夕げを囲む母のやすらぎ
田島　白雲　山人

氏族社会の形成

（其の二十四）

許斐の旗風



葦浦柴舟作
福田長庵画

転進（一）

「殿さま、どうした」

「ヘい、上方まで行けると楽しみにしていましたが、こうなれば仕方がありません」

克忠はうっすらと笑顔をみせていた。

克忠にしてみれば、いわばよその国の合戦、許斐城の攻防戦ほど力が入らぬのは当然であろう。

それに数万の大軍の一員として働く事は彼自身、さほど感激がなかった。むしろ仁木義長と共に九州に戻ることは、彼の心情からして、内心好都合と思っていたようである。

愈々赤間ケ関からその舳（みよし）を再度九州へかえしはじめた。軍船は東上の為、全船艤装をしていたが、九州に行く軍船は母足を早めるため、艤装を解いていた。

沖合いに出ると、東上する尊氏の軍勢が、すばらしい景観で一望される。

陸上七万騎
軍船千百余艘
あわせて八万余騎

と云われ、近来世人の覚えにもなこそみはっていた。

これが陸（くが）を行き、海を進んで行くさまは、けだし壮観をきわめたであろう。

梅松論の筆者も船路、陸地、同日に御進発なりしほしがほどは

両々、見通（みかよ）はして陸船に応（こた）ふ……と云っている。

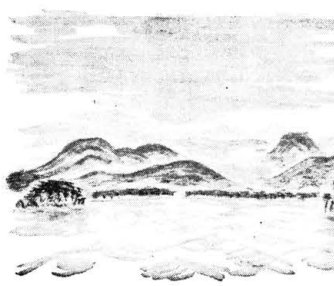
その大軍も次第に遠ざかり、仁木義長、渡辺小太郎克忠の分隊を乗せた船団は一路西下を初めた。

かえりみると、克忠が許斐城を出発してから半月余りしたっていない。新妻あさも、まさか今州に戻っているとは夢想だにしていないだろう。

そう思うと克忠は一刻も早く連絡をしたかった。しかし海路を進む船上ではどうにもならぬ。

彼はじっと宗像沖に船が近づくのを待った。

「許斐城を出発以来、長門府中にしばしが程滞在致せるも、九州の宮方が再然、仁木義長殿に加わり、肥前国（佐賀県）に転



進致す事に相成り候、此の旨家中の者にも御知らせ下されたく候。

克忠

許斐城主殿民殿

以上の書面をしたため、船団が鐘崎に近づくと、早速小舟を廻し岬村にさし向けた。

この海域は地ノ島と鐘崎にさえぎられ、幅はわずか千メートル位の水道になり、昔から海の難所として有名な処であるが、陸地と連絡を取るには一番良い場所である。

これを見ていた漁師達は、何事かと舟を岸出して、こちらにやって来た。

船上の許斐勢は一斉に船べりから蹶起をひらめかせる。

許斐一族と知った漁師達は大手を振って舟をつけた。

「お一渡辺小太郎克忠どの、これは又、なんことですか」

漁師達はけんか面持ちでただならぬ船団の動きをたしめようとしている。

「我が許斐の軍勢は急遽菊池征伐の為、肥前国へ参ることになった。その旨許斐の城に御知らせ願いたい」

克忠は、さきほどしたためた書面を漁師に手渡した。

「この書面を貴敷く」

克忠の願いをこめたまなざしに心を打たれた漁師達は大きく胸をたたき、

「よござす。まかせときなっせ」

大声で返事をすると陸の方へ引き上げていった。

これで許斐城との連絡はとれる。ひと安堵した克忠はじっと腕を組み、海上より宗像の山々を眺めつつ、はるかかなたにかすんで見える許斐の里に思いをはせるのであった。

新妻あさはどうしているか、出陣の盃を交した時のあさの姿が目に浮かぶ。美しく長い髪、きりっとした口元、襦襟（うちかけ）をはおり、主屋（おもや）に坐していた妻の顔が、波間に去来する。

戦国の世とは云え、新婚早々に出陣した克忠は、心の中で静かに新妻をいたわる以外に方法がないことを不甲斐なく思うのであった。

しばし瞑想にふけっているうち船は次第に宗像の里を遠ざかり博多へと進んでいった。

（つづく）

三月のまつり

一日　月次祭　午前十時

二日　孔大寺神社祭

孔大寺山（四九九米）当大社の東北にそびえ立つ四ツ塚連山の最高峰、その中腹に鎮座せられる旧県社孔大寺神社の春祭。

十五日　月次祭　午前十時

十九日　松尾神社祭　午前十一時

——境内末社松尾神社——

北筑（宗像、粕屋、糸島、福岡）の各社氏組合の主催により、本年の新酒を捧げて感謝祭が行なわれる。この祭は、先に十二月十九日のつくりこみ祈願祭の報賽（お礼）祭である。当大社の御祭神、市杵嶋比売命が酒造守護の名総主宰神であらせられるところから全国杜氏の信仰が篤い。

二十一日　春分祭　午前十時

国民の祝日、俗にいう彼岸の中日にあたり、農業上は野菜の種まき時で、重要な時期でもある。

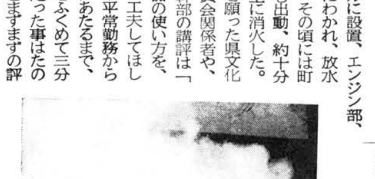
一般家庭に於いては、この日を中心にして、祖霊を祭り子孫としてのまごころを捧げる慣習になっている。

祖先の霊威を、氏族全員の魂と血肉の根源として崇敬し、慰霊の行事を厳粛に行なって怠らない生活が、祭政一致の氏族社会であった。祖先の偉大なる業績があってこそ、氏族の今日の繁栄があり安泰があるとの信仰は、同時にその業績を思実に受けつぎ、発展させるべき義務感を生み、家職の存立上必須の縫製技術の習得向上の祈りともなったのである。

これが祭政一致の氏族社会が、氏神奉斎を軸とする生活を営んだ姿と推察される。氏族と氏神との関係から見れば、古事記に「此の三柱の神は、胸形君等が斎ら祭神」と挙げている。

ここで宗像郡の隣、粕屋郡の志賀島に鎮座の志賀海社の御祭神、綿津見三神と阿曇族の関係に触れてみたい。

この島は細長い半島、即ち海の中道と言われる帯状の突端にあって、周囲約十三粁、わが宗像の大島とほぼ同じ広さで、現在町制を施いて志賀町となっている。大島



灯りをつけましょぼんぼりに
お花をあげましょ桃のはな

三月三日の雛祭りは祓いの習俗から起きたものなのです

もと中国では三月三日、または三月の上巳（第一の巳の日）に水辺に出て祓いを行う風習がありました。これがわが国に伝えられて、巳の日の祓いとして、天子の玉体の祓いを行なったのを初めとして、上流社会で行なわれるようになったのです。

この時に使った祓いの人形は、加茂川に流していましたが、町中の川に流すことに不安が感じられたため、直接海に流す方法も後にはとられました。もともと祓いの物を供え、また調度も緋毛氈、屏風銚子等が飾られだしました。元ら、両陛下の高御座と同様に「男雛を左に飾ること」が提唱され、現在ではこの形を模しています。

この雛祭りの本来の意義である雛を流すと云う祓の行事は、未だ全国至るところに残っています。その中で最も名高いのは鳥取県の例で、ここでは串にはさんだ流しびなを笹に入れたり桟俵にのせて川に流す風習があります。

流し雛堰落つるとき立ちにけり　花蓑

祭りまつり（三）

用いられるものがあれば造たくなるのが人情で、それではきれいに飾って、一杯ヤッカーとなったのでしょう。凡そ江戸時代の少し前から始まったのではなかろうかと言われています。

江戸時代に入りますとこの日は五節供の一に定められ、雛と種々の調度品が作られ、女雛の飾り方は一定の定めはありませんでしたが、昭和御大典後から「お雛さま」と言われるまでになったか風銚子等が飾られだしました。元禄の宝井其角の句に

「段の雛清水坂を一目かな」

とありますが、雛段式の飾り方が行なわれだしたのは元禄の少し前からだろうと言われています。この時代になりますと、女児の成長を願うと共に将来良縁が得られるようにと祈りをこめて、調度の中に嫁入道具一式の模型が加えられるようになりました。

女性優位時代の昭和元禄とはだいぶ趣きを異にしています。男雛、

防火訓練行われる

文化財防火デー

一月二十八日、午後二時頃、宗像神社本殿付近の土蔵より出火した。と云ってもこれは文化財防火デーにあたり行なわれた防火訓練である。小雨降る午後、「本殿付近が火事」権宮司が役場に知らせる電話と同時に、社内の非常通報器が鳴り響く。日常勤務についている職員は、すばやく、当社自衛消防団編成の通り、化学消火器班が火元にかけつける。又放女を中心としたバケツ班は神門わきの用水戸よりバケツリレーによる消火にあたった。一方ポンプ班は、当社のポンプを宝物館裏庭にある水戸よりバケツリレーによる消火にあたった。一方ポンプ班は、当社のポンプを宝物館裏庭にある

であった。現状の防火設備では早期発見、初期防火活動だけがたよりだけに、職員の防火訓練も真剣そのものだった。

大漁祈願祭斎行さる

—中津宮・辺津宮に於いて—

中津宮大漁祈願祭は旧暦正月元旦に当る二月十七日午前十一時、大島漁協組合員等百余名が参列して盛大に斎行された。

当日は、連日吹き荒れていた玄海の寒風も静まり好天候となった。

定刻、奉仕神職につづき、大島漁協組合長古川俊枝氏以下組合員、沖中両宮奉賛会役員外関係者一同、本殿に参進、修祓に続き、道主奉貢と称え奉る宗像大神の神宝宗像業協同組合長、並びに宗像郡水難救済連合会長をはじめ、郡内七浦の漁多数が参列された。

引続き斎館に於いて、昭和四十四年度の海洋神事奉賛会の協議会が開催された。久保宮司の挨拶に続いて、先に開催された本年の皇室献上若布についての報告が葦津権宮司からあり、次に当社秋季大祭海上神幸に関する協議が行われ、種々活発な意見がだされた。

引続き斎館に於いて、沖中両宮に年間十数回にわたって献魚・献品された二十五名の篤行者に対し当社より記念品が贈呈された。

祭典終了後、参列者全員斎館に参集して直会が行なわれた。その席上で古川組合長より「去る二月十四日の八幡丸遭難事故に於ける奇蹟的救出は将に宗像大神の奇しき御神徳と御加護のたまものであり、それ以外には全く考えられない。今後共、益々御神威が発揚されますよう全漁民挙って敬神の誠心を捧げたい」旨の挨拶があり、神酒拝戴、なごやかな談笑の裡に大祭を終了した。

今年は正月以来の暖冬異変と悪天候が続き、漁況は余り思わしくなかったが、この大漁祈願祭を契機に名に負う玄海の波浄をのり切り、堂々と前向きに進まんとされる各位の気概は並々ならぬものがあった。

一方、同日午前十時三十分より当社辺津宮（総社）に於いても大漁祈願祭が斎行され、海洋神事奉賛会長、並びに宗像郡水難救済連合会長をはじめ、郡内七浦の漁多数が参列された。

引続き斎館に於いて、昭和四十四年度の海洋神事奉賛会の協議会が開催された。久保宮司の挨拶に続いて、先に開催された本年の皇室献上若布についての報告が葦津権宮司からあり、次に当社秋季大祭海上神幸に関する協議が行われ、種々活発な意見がだされた。

今月のことば

神と申すものは、正直なる事を好み、亦浄なる事を好み給ふ。夫れ故、神を拝むには、先づ己が心を正直にし、亦己が体を清浄にして、外に何の心もなく、ただ謹み拝むべし。是を誠の神信心と申すなり。その信心が積りゆけば、二六時中、己が心が正直にて体が清浄になる。是を徳と申すなり。

——吉田松陰書簡——

宗像大社　史話

社史の中の宗像郡民（三）

天明四年百姓甚兵衛が、偶然島の一隅から掘り出した双国王の金印が、有力な古代研究の資料として注目を集めてきたが、この博多湾口を擁する要衝は、当然宗像と関連する防衛線が早くから考えられ

九州内陸は勿論、国土全般の防衛的見地から、早く氏神を中心とする氏族集団の往視するところとなっていた現実問題が、宗像大神の志を奉斎する宗像族を本衛として、綿津見神を奉斎する阿曇族が志賀島に、前衛の役割を受け持つに至ったのであろう。

現代史学の一傾向として、外国の影響を神とのお祭りする民族的信仰が、有史以前の神話伝説の時代に氏神崇敬の思想の伝承によって、神社となったのである。宗像社を中心とする宗像族の社会は、同族の首長によって統率され、宗像族自体の自治する大家族的集団によって、形成されたものにがいない。

（つづく）

それはわが国土の全域に、氏族全体が氏神の祭祀を起し、共通の魂と血肉の根源たる祖先の祭りを絶やさなかった国民の伝統を、考察する要がある。そこには統率者と被統率者の単なる権力関係、圧力による神社護持が、上代から続いたのではない。

即ち、氏族共通の祖先、父祖の霊魂を神としてお祭りする民族

と創建理由を見逃すわけにはゆかないのである。

古事記によれば「此の三柱の神は、阿曇連等が以ちいつく大神」と当に「まつらせ」とあって、宗像三女神と胸肩君の関係と同様に、綿津見三神と阿曇族との氏神氏子の形成が、表現されているのである。

易世革命による政権の奪取、武力による異民族の征服等の史眼を、わが上代に向けるのは当を得ないであろう。

（つづく）

出光丸の姉妹船

二十一万トンタンカー　松寿丸竣工

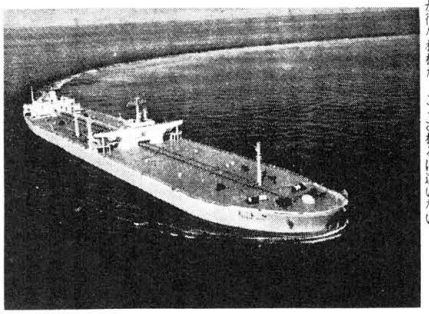
出光タンカー（株）の油槽船「松寿丸」の宗像大神鎮座祭が去る二月二十九日横浜埠頭船舶操艇室で厳粛に斎行された。

前日まで暖冬模様であった気候は一変して当日早朝からみぞれまじりの雪模様となって、横浜埠頭には日波が打ち寄せていた。

松寿丸操艇室の背面には宗像神社本殿を縮小した木の香新しい流れ造りの社殿が安置されており、前日、当社職員奉仕によって神鏡が奉安された。

当日午前十時、出光店主、出光計助社長、出光タンカー門田重役、松寿丸中船長を始め関係者七十名並びに報導陣が参列して祭典は始められ、久保宮司の祝詞、船の清めの後、各代表が玉串を奉奠、出光計助社長が神前に進み「この船を松寿丸と命名する」と力強く命名書を奉読した。祭典後、出光社長は「この船の名松寿丸は父の雅号であった松寿翁に因んで号けた。父もきっと喜んでこの船を見守って下さるものと思う。どうかこの船の皆様も健康で安全航海を続けて欲しい」と挨拶され、これに対して田中船長以下乗組員は「元気で行って参ります」と答えた。言葉少い内にも、互いの信頼感あふれる雰囲気が印象的であった。

十時三十分から左舷上甲板上において引渡式が行なわれた。花火が数十発冠天の中に轟き、君が代の合唱と共に国旗が掲揚され、受渡人署を結集し、神の前に敬虔である人々によってこれ等の事が達成されるに違いない。



越航海運丸十八ノット。これに要する乗組員はわずか三十一名でオートメ化が徹底的に計られている。出光丸の経験を生かし、より全ゆる機能の向上が見込まれており、数年後にはコンピューターが組込まれると云う。大型化と安全性の向上という背反する命題に一歩一歩近づいてゆく事であろう。

玄海町にも実現！

～農集電話開設～

先般完成した農業集団自動電話は好調なすべり出しで、仲々好評を博している。

この電話は農業地域住民の文化と生活水準向上に役立てるため、国と地方自治体の援助のもとに開設されるようになったもので、玄海町では昨年から架設工事が進められ、数カ月で早期実現した。

先般の通話式には、当日雨天にもかかわらず、玄海小学校々庭の一角に設けられた勤交換所前の斎場に、高橋玄海町長、黒田議会議長、宗像電報電話局長、関係者一般利用者等、多数が参列、宗像大社職員奉仕により終了した。

式中、記念通話が高橋町長と行徳田主丸町長の間で行われ、「もしもし」の声と共に一同の顔がほっとほころぶ。この喜びの顔が即利用者の顔と思われた。

この電話は普通電話に比べ、架設費用は安く、地域内だけでなく、市外とも話され秘話式で大変よい。同町には今まで有線放送が各戸間の連絡機関として活躍してきたが、永年の使用で相当老朽となり、故障も多くなっていたことの点、この度の農業電話の開通で利用者に親しまれてきた有線放送も姿を消す。

玄海町には普通電話が約四百台あるが、農集電話六百五十八台となり、世帯数二〇五〇に対して二世帯に一台の割合となり、全国地方自治体の中でも高い水準の町となった。

利用者の声を聞いていると、局までの親回線が六本しかないため、ちょっと時間がかかる時もありますが、とても便利ですと大変な喜び方であった。

宗像の諸城

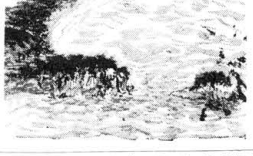
城址を訪ねて　(十)

大障子古城

この城は別名を津瀬城とも呼ばれた。城址は玄海町多礼部落から六丁ばかりの、滝ノ口の山上に三百坪程の平地として残っていた。津瀬山とは、滝ノ口から北にかけての山を呼称したもので、ここから津瀬城の呼名が出たのであろう。津瀬山の城を中心にした山中には、所々に堀切を廻らし、攻防に備えた。

古来この滝ノ口、津瀬山ともに宗像大社との関係は深いものがあった。例えば、政所機殿十二月十八日の神事に津瀬の滝水を汲み神前に供え、津瀬山からの神を用いて祭典を行なったと云われている。

このような由緒ある所も、近年の「宗像みかん」のブームにより、みかん園造りがなされ、滝ノ口の池を中心とした津瀬山一帯にはブルドーザーが入れられ、山容も日々変化しつゝある。



草崎城址

神湊の旅館街を過ぎ、大島への渡船場に至る間の左側に小高い山がある。人呼んで草崎半島と云う。城もおそらくこの山上にあったものと思われる。山上からの展望は田島の森をはじめ、鐘崎、勝浦と海岸の各要所を見張ることが出来る。

古書に依ると、第六十二代大宮司氏俊の端城とされ、後に占部甲斐と云う者が守っていたとされている。今日では、山上は約三反ばかりの平地となり、当社秋季大祭「みあれ祭」の頓宮となっている。

勝島城址

勝島とは、神湊から海上約二キロメートルの処にあり周囲一、六キロの小島である。

この島で安部氏任の孫義宗が山匿秀遠と戦って、大いに勝利を得たところから勝島の名が残ったといわれている。

島の山上に二反計りの、平地があり、ここが勝島城址である。

城は、正徳享保（一四五二～五）年間の頃、南京釜商の神賞を取締る為のものであった。ここには大船と加子を置き、番士を遣して、海賊の折にもこの城に手入れをしている。

宗像神社も第六十二代大宮司氏俊の頃から海賊退治に大いに進出したことから、当地が宗像水軍の一根拠地であったのであろう。

開けゆく宗像郡

東郷福間団地造成なる

この程、国道三号線沿いに造成された東福間団地は、福間駅の東の入口である日水峠から程近いところに位置する。

この団地は総面積約二十万坪、戸数約二千戸を予定して、去る昭和三十九年に計画着工されてから約四年の年月を経て、ほゞ完成したもので、いま最後の工事と整備の段階に入っている。緩かな丘陵地帯を巧に生かした団地造成は見事な景観である。完成後の人口は約七・八千人と見込まれるところから教育施設の必要が考えられるが、これは神興小学校の移転をもって当てられるとのことで、福間町（町長井原元彦氏）の意向としては、出来れば今年の夏休み中に移転を完了し、九月一日に開校をしたいとのことである。四月からの着工予定で、いまその準備行程がハイピッチで進められている。

同町にはこの外に八幡製鉄団地（寮団地、戸数約四〇〇）や、国鉄団地（大公団地戸数約五〇）等があるが、又個人の住宅も数多く建設されている。

これは云うまでもなく、宗像郡が北九州市と福岡市との丁度中間地域に当たり、自然、環境、交通、水質量等に至るまで、ベットタウンとしての地理的立地条件が申し分なく叶っているからで、郡内各町とも積極誘致開発と並行してベットタウン作りの開発にも真剣に取組んでいる。特に福間町に於いてはこれを重点政策として掲げ、その実現に努力している。

現在福間町の総人口は一万八千人。戸数は四千三百戸であるから、この東福間団地の造成によって人口は約三割強の増加、戸数は約五割弱の増加となり、大福間町へと一歩前進したことになる。

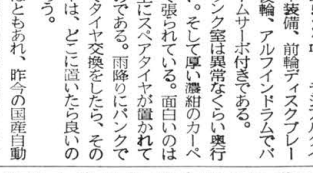
新しい町造り、これは地理的条件がそろえば不可能なことではない。しかし、これに加うるに心豊かな生活環境、これは古き良き伝統を有する郷宗像にして始めて可能なことであろう。

話題の新車をみる　(二七)

いすゞ117クーペの巻

戦後の一時期に見る国内の自動車はタクシーにしろ、社用車にしろ、個人の車にしろ、はては警察パトロールカーにいたるまで、総てと言って良い程、大型の外車であり、国産車と云えば十型フォードを多少近代化したような独特な箱型スタイルのダットサンくらいのものではなかったかと思う。それがどうであろう。現在では生産台数において世界第二位とか、第三位とか云われ、輸出においても欧米のメーカーを敵に廻して驚異的売行きを続けているとの事である。時代も変れば変ったものである。そして国内の生産にしても、軽自動車、小型自動車の時代から、今では驚をつくした2,000cc級ハードトップの時代に移行して来たのである。

今回は四十一年、四十二年と東京モーターショーに参考出品され、よやくにして四十三年十月二十一日に発表されたいすゞ117クーペについて紹介をしたい。



この車の発売は発表する云々来年こそは：云々と、悩ましばかりで実は慎重に計画され、産声をあげるにまことに長い年月を費している。それは東洋工業のマツダルーチェが生産計画し来四年、モーターショーにて発表以来三年の歳月をかけたと同様である。

スタイルは、全長4280㎜、全高1320㎜。全体が低く、流線型ファストバックスタイル、完全四座席のクーペで、このタイプにありがちな後席の窮屈さを解決している。イタリアのギア社と協力制作した流麗なスタイル、三年前の第六回国際自動車エレガンスコンクールで名誉大賞を受賞している。

生産は注文生産ではないが、小量限定で一台一台を入念に仕上げる方針とのこと。東京店頭渡し価格百七十二万円也、エンジン排気量1584cc、ベレット1600GT、プローリアンと同排気量であるがDOHC、二個のソレックス・ツインチョーク・キャブレター採用、120馬力、最高速度200Km/H、SS1/4マイル16、8秒、最少回転半径5.2m、ラジアルタイヤ標準装備、前輪ディスクブレーキ、後輪、アルフインドラムでパキューム・サーボ付きである。

トランク容量は常ならい奥行が深い。そして厚い濃紺のカーペットで張られている。面白いのはその上にスペアタイヤが置かれているのである。雨降りにパンクでもしてタイヤ交換をしたら、そのタイヤは、どこに置いたら良いのであろう。

何はともあれ、昨今の国産自動車の性能は飛躍的に生長をとげている。問題はこの性能について行けない国内の道路事情であろう。

八幡宗像会新年総会

――小倉の北京飯店で――

恒例の八幡宗像会新年総会が去る一月二十二日北九州市小倉区の北京飯店で開催された。

定刻近くには、会員が三々五々会場に集まり、北京飯店の太広間は和やかな談笑の渦に包まれた。定刻、岡崎会長のユーモアな挨拶に始まり、会の経過報告、決算報告が行なわれ、この後、本年度から会費値上げの提案があり、討議の後満場一致で可決された。

懇親、喜寿を迎えられた会員にはそれぞれ記念品が贈られ、終りに宗像大社御復興の概況について報告があり、来るべき募金の際には一層の御協賛をお願いした。

この後宴会に移り、午後八時過ぎの閉会を惜しむ眼わい、同会の弥栄の念につきまれた。

宗像伝説　其の八十九

「国語の父」

八波則吉

戦後、すっかり日本語は乱れ、正しい言葉、美しい文章がなおざりにされる傾向により、こうした風潮を慨嘆する人々も少くないが特に明治、大正生れの人達には一入その感が深いようである。

そして、これら年輩の人達の心の中に、幼い日の詩情豊かな思い出として、今尚懐しく生き続けているものは「ハナ・ハト・マメ」で代表される小学校の国語読本であろう。そして、この国語読本の生みの親あり、更には「現代文の育ての親」「国語の父」として盛名をはせた人こそ、郷土宗像が生んだ逸材、八波則吉翁その人である。

彼は明治九年三月一日、旧上西郷村内殿で生れた。幼時より神童とうたわれ、中学修猷館に学び、熊本の五高に進んだ。五高では工度、夏目漱石が教鞭をとっていた時代で、彼は激石に可愛がられたが、とかく英文学の優位を口説する漱石に「日本人はまず正しい日本語を覚えるべきです」と言ったという挿話がある。首席で五高を卒業した彼は、東大の国文科に進み、只管、国文学の勉学に若い情熱をそそいだ。

明治三十四年、東大卒業、すぐさま招かれて四高（金沢）の国文学教授として赴任。以来十一年間、教鞭をとるかたわら、正しい日本語の確立に意を尽し、更に新国文を体系づけ、情操精神教育の分野に新生面を開拓した。大正五年、抜擢されて教科書編纂委員となり、高野辰之博士と共に新しい国定教科書「国語読本」の作成に当った。彼の筆になる「一太郎やーい」「五二じいさん」「石安工場」などの名文は、前述のように年輩の人達にとっては今尚懐かしいものであろう。

昭和九年、母校五高の教授に招かれ、国文学の講義に当ったが、彼の講義は独特で、古事記、日本書紀、大鏡、徒然草などは全部記して、教室には本を持たずに入りさすがの記憶力を誇る学生達もこれには驚いて頭を下げたという。そして昭和十五年、六十七才で退職するまでが、彼の最も活躍した時期であった。この間に中等学校の国文、作文教科書、課外読本、教養書など四十種にのぼる著書と福岡市歌、福岡高女校歌などの歌五百をつくっている。ことに講談社から出版した「婦人手紙文範」は、所謂、八波調美文として全国婦女子の胸をときめかした。

昭和二十年七月、終生の地と定めた熊本市内の邸が、空襲により焼失、著書数百冊、蔵書三千冊も共に灰燼に帰し、失意を抱いて故郷の福間町内殿に帰ってきた。帰郷後間もなく、眼疾がこうじて遂に失明、戦後は童話などの著述に専念し彼の口述するのを夫人が記述した。また月に一度は杖をついて村の小学校を訪れ、子供達に「おじいさんの話」をして聞かせた。晩年は不遇であったとはいえ、静かな楽しい日々であったといえよう。

彼の死はまた風変りであった。生前に遺言や、自分の戒名はもちろんのこと「今は生待つばかり。良いご縁とお世話になりました。お先にごめん、はいサヨウナラ」という別れの言葉と、何事もしたい仕事はしてしまい今は生待つばかりなりという辞世の歌を残し、またこれも予め書き残した死亡通知のとおり「七十八才の高齢で、眠るように死にいたしました」と昭和二十八年十二月七日永眠した。いかにも明治の気骨人らしい生涯であったといえよう。

× ×

宗像大社献詠俳句作品集（七五）

初詣で宮居の鈴の緒御神鏡に

福岡　広田　三都

平等寺　中野　きみ

初場所やラジオを腰に麦手入

門司　永島　哲夫

市議戦も既に終盤日脚伸ぶ

田熊　小野　淡坡

笹鳴や孤独清貧師の庵

田熊　小野かをる

七草の季節すれりまどかなり

大井　吉田　和子

炉火熾ん言葉すくなく向き合ひて

津屋崎　浜津　鴻浪

残り葉を拉し去る風径昏し

津屋崎　鶴賀水

旅の地図ひろげ蜜柑の皮たまる

久留米　篠田太郎坊

幸せは後悔なき日々紅梅咲く

津屋崎　白石百合蔵

青む地のここにもころがる卵の殻

津屋崎　佐川　凡石

老梅の杖をたよりになほ開く

大井　木原　房子

一途なる吾子の瞳や独楽澄みぬ

田島　白雲　山人

老眼のこたつに残る梅日和

出光佐三一問一答シリーズ㉛

マルクスが日本に生まれていたら

マルクスは、自分の思想は労働者階級、ないしは彼支配者階級の立場に立つ思想であると明言しており、社会が階級的に分裂し対立しているかぎり、思想もなんらかの立場に立たざるをえないと考えています。こういう考え方について、店主はどうお考えですか。ちょっと質問の趣旨を敷衍しておきますと、先にも言いましたように、マルクスの考え方の基本は唯物論ですから、人間の意識が存在を規定するのではなくて、人間の社会的存在、実在そのものが、人間の意識・精神を規定するのだと考えるわけです。つまり、その人が置かれている社会的条件とか、立場というものが、その人の考えを規定するというわけです。したがって、人間の考えというのは、彼の置かれている社会が階級的に分裂しているかぎり、いろんな言い方をしても、それはなんらかの階級の立場に立たざるをえない。超階級的な立場、あるいは両方に妥当する中間的な思想はないというように考えています。

出光　全人類の希望しているものは、永遠の平和と福祉以外には絶対にない。いかなる場合にも、それ以外にはない。だから思想というものも、仲良く平和に楽しくしようとする思想以外に、あるべきではないと思うね。階級的立場というものが、その人の考えを規定するというわけです。したがって、人間の考えというのは、彼の置かれている社会が階級的に分裂しているかぎり、いろんな言い方をしても、それはなんらかの階級の立場に立たざるをえない。超階級的な立場、あるいは両方に妥当する中間的な思想はないというように考えています。

出光　全人類の希望しているものは、永遠の平和と福祉以外には絶対にない。いかなる場合にも、それ以外にはない。だから思想というものも、仲良く平和に楽しくしようとする思想以外に、あるべきではないと思うね。階級的立場というものが、その人の考えを規定するというわけです。したがって、人間の考えというのは、彼の置かれている社会が階級的に分裂して、対立闘争するというような思想は、思想と呼ぶに値しないのではないかね。それは手段じゃないか。永久不変の思想は、平和と仲良く暮らすということだ。マルクスが最後に望んでいたものもそれだと思うね。ただ、いかに一時的な手段とはいえ、プロレタリアートの階級だけの平和と福祉を目指すというようなことは、駄目だね。それだから行き詰まったんだ。マルクスは西欧の土地に生まれて対立闘争の道のみを知っていて、日本のような仲良く平和に行く道を知らなかったから、階級闘争に行ったんだろう。そこで階級闘争の道を歩くとすれば、マルクスの言うとおり、非合法的唯物論になるのではないか。

出光　そうではなくて、あくまでも永遠の平和と福祉をつくるという思想の上に立って、それにはどうしたらよいか、ということを考えるべきであって、階級が分裂して対立闘争するようなことを言うなら、平和とか、福祉とか唱える資格はないよ。それは階級的な我欲・利己・搾取の道ということじゃないかね。思想は全人類的な立場に立った思想しかあるべきではないと思うね。階級闘争しながら、平和と福祉を求めるなど、根本的な矛盾である。しかしマルクスの場合でも究極に求めているものは、人類の平和と福祉だろう。階級の対立闘争ということは手段だよ。どうしてそういう手段をとったか、どうして手段を誤ったか、ということになれば、マルクスの生まれた土地・民族に責任があるんだが、それにしても、どうしてマルクスが大所高所に立って、仲良く平和に暮らす日本のような道を見つけ出しえなかったのかと、ぼくは残念に思うね。

質問　こういう点はどうでしょうか。人間が二人以上仲良く暮らしていくのは当然だ、という考えにたどりつくため、やはりそれにふさわしい社会的状態が基礎にならなければならない。たとえば、ひどい摩耗をうけて、最低の衣食も足りないという状態を感じている人がいるとします。衣食足って礼節を知るということで、そうした状態で人間が仲良く暮らせるものかどうか。たとえば日本においても、非常にみじめな、その日その日の食事も満足にできない状態に置かれている人に、お前たち仲良く暮らせと言っても、簡単にわからないのじゃないかと思いますが……。

出光　もちろん、衣食足ることは必要だけれども、さらに大事なことは、足ることを知るということだね。恒産あれば恒心あり、ということと真理だが、恒心あって恒産あり、ということも言うるんだね。それから江戸時代の百姓はみじめな生活をしたと言うが征服の祖先をもった外国のように、自分の生命・財産にいつも危惧を感じて生活はしていなかったよ。戦国時代にいえども、武士同士はお互いに敵じ戦っているけれども、国民とは戦っていない。良民を傷つけたり、その財産をむやみやたらと没収したりはしていない。もっとも日本にも幕府という外国の征服者に似た形はあったが、全国民から見れば、やはり無防備の皇室のもとに、奴隷にならずに平和に暮らしているよ。幕府のごときも、ぼくはあったにしても、日本の歴史の中心を流れているのは、無防備の皇室を中心とした澄み切った流れであり、国民も無防備で平和に仲良く暮らしたいということだ。この中心を見なければ、幕府だけを見ていると、日本も征服の西欧と同じということになる。

日本にも生活に困った貧乏な人がいなかった、とは言わないが、その人たちは、そうなる原因を自分でつくっていたのじゃないかね。働いて貧窮に暮らしていれば生活に困るということはないよ。きっと周囲の人の親戚が助けているはずだ。

30　道徳は時代や社会とともに変化するのか

質問　マルクスは、道徳や倫理が人間や社会にはじめから備わっているものではなく、人間社会の発展にしたがって発達するものと考えています。そして階級社会では、階級的道徳が存在し、それぞれ階級の利益を表現するものであると考えています。

ところで店主は、時代と民族を越えた普遍的な道徳を認められますか、それとも道徳は時代とともに変化すると考えられますか。

出光　道徳というものは、時代とともに変わるようなものではない。人間社会の平和・福祉をつくるのが道徳であって、あとはなにもありゃしない。道徳というのはつくるものでなければ、書いたものでもない。人間の心の中にあるものだ。二人以上の人間社会で平和にしあわせに暮らしましょうということ、それが道徳なんだ。しかし人間はなかなか盾性やわがままを発揮して非道徳なことをするからそれを戒めるために宗教、哲学などがある。ところが西欧では征服者が被征服者を治めるために法律をつくり、組織をつくったのがモラルであるように、ぼくは聞いておるがね。そういう対立闘争のモラルというものは、時代とともに変わるだろうし、国によって違うだろう。しかし道徳は全人類が平和にしあわせに暮らすということであって、それ以外にはない。したがって、民族や時代や国によって変わるようなものではない。この意味で、思想も道徳も人類の存亡にかかわる唯一永久不変であるかぎり唯一永久不変である。マルクス主義では、道徳や対立闘争の手段と勘違いしていやしないか。

質問　店主は、先ほど道徳の理念として、二人以上の人間が生活するには、お互いに仲良く平和に暮らすことだ、と言われましたが、そのような考えの出てくるもとは、なんでしょうか。

出光　そのもとは愛だよ。人類愛。愛ということは、これは簡単に言えば、相手の立場をいつも考えるということ、とくに強い人が弱い人の立場をいつも考えるということだ。相手の立場をいつも考える、ということは互譲互助だ。逆に対立闘争の国では、自分のことを主張する一方なんだ。自由を主張し権利を主張する。外国では征服されたり、圧迫されてきているから、自由・権利を主張するようになるのは当然だけれどもね。日本では主張せずに相手の立場をいつも考えているから、ここに互譲互助という言葉が出来てきたんだね。

（つづく）

経営とは何か

PFドラッカー

利潤が、その社会の発展のための資金、資本の唯一の根源であり、また予見できない、いろいろな危険をカバーする根源であると考えねばならない。

自分の企業に自信を

一つの大きな真理として、企業をやっている経営者自身が、自分の企業に対する信頼の念、自信というものがないと成功はおぼつかないものだということを心得ておきたい。

これは食べ物屋の経営をしている人たちを見るとよくわかるが、食べ物屋をやって成功をしている人たちは、食べ物が大好きである。そして食べるということは人間にとって非常に楽しみであり、ためになると確信している人たちである。ところが食べるということは、生活上どうしても必要なので、やむを得ない事柄だという考えの人々が、いかに科学的に、能率的に食べ物屋を経営しても、うまくいかないだろう。

したがって英国に行ってみればわかるように、英国で成功している食べ物屋は英国人が経営しているものでなくて外国人が経営しているところである。これは、英国人は食べるということは、からだのためにならないというような考え方をしているために、うまいものが作れないように思われる。

同様に金というものがすべての世の中の悪魔のもとであるといったような考え方をしている人は、余りいい銀行家にはなれないだろう。

大島の海況は割合に暖かい、それに島中到る所にアジロが点在しメバル釣で賑っている。それに船掛りでススキが面白い程釣れる。北西の季節風の激しい時は、避難港西泊止、真珠棚附近の湾の中に探りを入れてもよい。中型メバルに交り、時々大型のメイタが期待出来る。

魚信

～大島磯のメバル釣り～

二月下旬より寒波の襲り返しで快適な釣日和には中々恵まれないが、それでもこの酷しい寒さを幸いに抱えれば、適当に釣の醍醐味を味う事が出来る。

メバル釣りの仕掛けを簡単に紹介すれば、釣竿三間（五、四〇米）胴調調、道糸二号、ハリス〇・八号。

鈎丸袖五号。唐竿と小浮木。極小カミツブシ。餌は生カヂキが得られれば最高（毎朝カヂキ網が出ているので船頭にわけてもらう）又、田えびでもよい。メバルは生餌には思い切って飛びつくが、餌は警戒して中々喰いつかないので当りがなければ、時々餌を取りかえねばならない。

メバルはポイントえさ間違えれば群成しているので一時的に面白い程上るが、ポイントを過ったり時間的にすれたりすれば全く当りがない。比較的に朝夕がよく、曇りかな日は夜釣りが最も効果が得られる。

又、波止では、カサゴ、アブラメがよく釣れるが、これには掛けや餌の心配がない。市販の百円程度の釣具一式そろえ、家族連れの行楽としゃれこんでも面白い。

（つづく）

宗像藪庵先生百話

水飯

南方

華やかなりし頃

宗像　太郎坊

同席していると、遠慮もなく腹一杯やっている。日本人だったらもう二杯目の飯になると、心ともなく、いいです、いいですといって、そっと箸し出したりするものである。ネシャ人では招待した方も大いに喰われるのを覚悟しており、またその方が喜ばしいと思っている。呼ばれて来る人も、もはや腹一杯喰べることが礼儀さえなって来ている。わたしは最初、日本人の俺でさえ遠慮して喰っているのに失敬な奴どもだなと思っていたが、だんだん、俺も喰わなきゃ損だと思うようになってきた。

ガヨ族の労務者が死亡する時を見ていると、家族の人達がもってきた獣を屠殺し権利を主張する。外国では征服されたり、圧迫されてきているから、自由・権利を主張するようになるのは当然だけれども、日本では主張せずに相手の立場をいつも考えているから、ここに互譲互助という言葉が出来てきたんだね。

（つづく）

いたましい食べ物

岩間の残飯をつまみ上げて喰べるのもいたましいが、この人達はそれよりも教養の方が問題になるらしい。

わたしが広東陸軍病院にあり、近衛野病に転属になる時、黄埔の分院に泊り、翌朝の船を待ったのであるが、その夜のことである。分院長、といっても軍医さん二人であったが、この人は漬物すじの豪傑で、部屋の中央に囲炉裏を掘り、火を焚きながら、山賊のように酒をのんでいた。わたしもご相伴になった。当番兵がどこかへ出て行く時、軍医さんに、箸筒の方を指さし、こそこそと耳打していた。後で何んといっていたのですかと訊くと、「あの出出しに撮り酢しが入っていますよ」といったんだという。あきれた主従だと思ったが、おかしくもありまた、軍人精神も部隊により隔分違うものだと思った。横に大お仲間入りして囲炉裏をかこんでいたが、軍医さんが時時、「おめを喰いなさるか」といってはバナナの皮をむいてやるとうまそうに喰べていた。ほほう、大でも果物を喰べるのだなあと感心する。その後スマトラに進駐して、メグンの慰安所を衛生巡視していると、パン助が蜜柑の皮をむいて犬に喰わせている。ちゃんと側に坐って待ちきれないようにして喰べていたのにはちょっと、驚いた。さらに驚いたのは、アチェ州の人里遠くはなれたジャングルの中の部落、といっても営林署の派出所が一軒あっただけであるが、人が何処かに去り、肥った猪が二匹だけ残っていた。ここは部隊の中継地点。兵が四、五人いて、塩干魚や動物の骨を捨て散らかしていたが、猪は見向きもしなかった。

（つづく）

編集後記

昭和三十六年一月に発刊致しました宗像誌も、来月四月号をもって百号になります。

この間、皆様方の暖い御支援御協力により、曲りなりにもここまでまいりました事に深く感謝致します。今日では像鮮特のイメージが、心のふるさと宗像大社とともに親み深いものとなり、広く愛読されるに至りました。

これを機に、編集者一同も一層の努力を致す所存であります。皆様の御支援と御鞭撻をお願い致します。

尚、紙面をかりまして、寄稿者各位並に大和印刷所の方々に心からお礼を申し上げます。